

大分市立野津原東部小学校におけるいじめ防止の取組

～異学年交流の活動を通して～

熊 谷 和 世*

I はじめに～学校の概要

こんにちは。大分市立野津原東部小学校の校長をしております，熊谷和世と申します。よろしく申し上げます。私はこの小学校に勤務して2年目になります。今日はこの1年半の取組みを発表させていただきます。今回はいじめということがテーマですので，特にいじめ防止について学校で取り組んでいることを4点ほどにまとめさせていただきました。

まず本校の概要です。本校は昨年度140周年を迎えた非常に歴史のある学校です。平成17年に市町村合併によって野津原東部小学校として，大分市立の学校になりました。現在は全校の児童数が137名。単学級ですので，全校で6学級です。特別支援学級はありません。実は対象になる子どもがいるのですが，支援学級ができなかったので補助教員に対応してもらっています。それで合計13名の教職員で教育活動を行っています。地理的には，市内中心部から12キロメートル離れた所にあり，自然豊かな環境に恵まれた地域です。また大分市が小中一貫教育の取り組みを進めておりますので，その中で連携型の小中一貫教育の研究指定を受けて6年目に入ります。野津原中学校と3小学校で共同研究をしています。非常に校区が広くて，車で通って来る子ども達もいますが，徒歩で来られる子ども達は集団登校をしています。全校で97世帯ですが，やはり1人親家庭もありますし，祖父母のみと同居している家庭環境の子どももいます。また3世代で同居をしているという家族も多くあります。ですので，少し心配な家庭環境の子どももいますし，近くにおじいちゃん・おばあちゃんが居て安心な子どももいますし，いろいろな家庭環境があるなと思っています。子ども達も，おじいちゃん・おばあちゃん達と一緒にいるということで，基本的な生活習慣が非常に身につけていて，朝食の摂取率も高く，それから体力や運動能力も高いというような実態があります。

学校教育目標については，「豊かな心・確かな学力・健やかな体」という3つを前面に出して，これに向かって教育を進めていくことにしています。その中で特に「豊かな心」をいかに学校の中で育てていくかということでは，生徒指導や道德教育の充実を図るようにしています。具体的には，年度当初に教職員と共通理解をしながら，学級経営の中でQ-Uを活用しようということ，1人1人の心に寄り添っていこうということ，それから後ほど発表させていただきますが，異学年交流を進めていますので，その中にピア・サポートを取り入れていこうということを進めてきております。また道德教育の実践も進めています。当然，家庭や地域との連携も欠かせないことになってきます。本年度はあいさつ運動を進めていこうということでPTAと協力をしたり，学力を向上させていくためにしっかり家庭学習をするよう

本論文は，第6回大分大学教育臨床フォーラムにおける講演に基づくものである。

* くまがいかずよ 大分市立野津原東部小学校（当時）

家庭と連携を図ったり、そして保・幼・小の連絡協議会を2年前に立ち上げて、幼稚園や保育所との連携も進めていくということにも取り組んでいます。[スライド1～4]

では、学校の中でどういじめの対応をしていくかについてです。とにかくいじめが発見されてからは、迅速に、慎重に、丁寧に対応しなければならない。しかし、迅速に、慎重にというところがとても難しく、早く対応していくのですが、早く対応していくあまり、こちらの思い込みでどんどん進めていくわけにもいかない。ですので、やはり慎重に子どもたちの聞き取りをしたり、周りに聞いたりということをしなが、丁寧に関わっていきます。とにかく、いじめが起きた時に使う労力は本当に大きなものがあります。まず、寄り添ってあげること、それから保護者と連絡を取ること、そして周りの子ども達にどう対応していくかということ、さらに学級に、学年にということになると、大変な時間を割きますので教職員が疲弊してしまうこともあります。その意味では、やはり早く気が付く、早期に発見するということが必要ですし、私達教員はそういう目を養っていかなければならないということになります。そしてまた、いじめが起きない集団作りが大切です。ここに力を注いで、いじめが起きない学校集団、児童の集団を作っていかなければいけない、ということを考えています。この集団づくりは、本校が以前から取り組んできたところです。[スライド5]

Ⅱ いじめ防止の取り組み

1. 学校いじめ防止基本方針

いじめ防止の取り組みということで、4点お話をさせていただきます。まず1点目、学校いじめ防止基本方針についてです。学校でいじめ防止基本方針を作成しなければならないということで、昨年度後半から、学校の中で話し合いを進めて、25年度中にある程度の柱ができました。26年度からそれに基づいた対応を進めているところです。まずいじめ対策委員会の設置ということですが、構成メンバーは校長、教頭、生活指導担当、人権教育担当、学級担任、養護教諭です。本校の教員数からすると、対象になる子どもの学級担任が入ってくれば、ほとんどがこのメンバーになってきます。そこに必要に応じて専門家を要請します。本校にはスクールカウンセラーが配置されておりませんので、必要な場合をお願いをするという形になります。また、いじめ防止についての校内研修は、年度初めに行っています。[スライド6]

年間指導計画ですが、ここにはこれまで本校で取り組んでいたことも含めながら、いじめに関してというところで整理していきました。学級指導や学校行事については、これまで取り組んでいた仲間作りや運動会、東部っ子ふれあいの会という学習発表会等の行事も含めて1年間を見通したものにしています。まず4月に学級開きを行った後に、6月、専門家に来ていただいて4年生以上の子ども達に情報モラル学習を行います。いじめアンケートは年3回行っています。それから、12月に人権集会で、いじめ追放宣言を児童会を中心に発表するということをしています。教職員の研修としては、生活研を月に1回しています。これが非常に有効であると思っています。生活研は、気になる子ども達を担当が出し合うのですが、担任以外の教師からもその子に関する情報を集めて、継続的にその子の状況や変容を出していきます。すると、突然に「こういうことが気になります」という話が出てくることもあります。つい数日前の生活研では、こういう話がありました。運動会までは非常に元気であった児童のことです。運動会が終わった途端に非常に元気がなくなったようだというのです。それに気が付いた養護教諭が、生活研の中で「その子が保健室にやってきて、元気がない様

子だ。何か相談したそうだけれども、周りに友達がいる、なかなか話ができないようだ」と言いました。すると、そのクラスに授業に行っている専科の教員が「私も気になりました。それまでは授業中に結構発表していたんだけれども、やはりこの10月、運動会が終わってから元気がない」という話です。私は、毎朝、登校指導で正門の所で子ども達に声をかけて、挨拶をするのですが、同じようにその子のことが「あれ、元気がないな」って気になっていました。そのことを伝え、それを聞いた担任が「ああ、そうですか。クラスの中ではそうでもないのですが。この前も行事の時に元気に友達と話していたし、教室の中ではそういう様子は見られないです」と言います。ただ、いくつかの場面ではやはり気になる様子なので、目配りをした方が良いということになり、担任の方も「ちょっと気をつけて子どもと話をしてみます」「連絡帳の様子も少し気にかけてみます」ということになりました。このように、担任が見ていて気が付かないことが生活研の中で出てくるので、その子への対応がより丁寧になっていくわけです。[スライド7]

2. 異学年交流

2点目として、異学年交流の活動を行っています。中学校でも兄弟学級ということで、同じ1組同士1・2・3年と繋げて一緒に活動をするなどの取り組みがありますし、小学校でも1年生と6年生が何か一緒にすると、縦割り班を作るといった形で、ほとんどの学校で行われています。学習指導要領の中にも、異学年交流を進めるようにという記載があります。本校も異学年交流はこれまでもずっと続けてきていますが、その目標をしっかりと見直そうというところで、教職員と共通認識をしているところです。

本校では、児童一人一人が相手を思いやる優しい心、豊かな心を培うということを目指して行っています。全校児童を8班に分けます。本校は、校長・教頭を除いて教員が8名います（うち1人は養護教諭）が、教員が1班に1人付いて、6年生が中心となって活動を仕組んでいきます。時間は、朝の8時10分から8時半、20分間の集会の時間です。その20分間の時間が有意義なものとなるように、なかよし集会、体育集会、花植え集会という形で行っています。それから1年生を迎える会や6年生を送る会もあります。この会はお迎え遠足やお別れ遠足と絡めて行っています。[スライド8]

昨年度、私が本校に赴任した時には、その異学年交流の中で、1年生から6年生まで仲良く交流し、良い取り組みをしていました。ただ、これをもう少しシステム化し理論的に考えて取り組めないだろうか、あるいは学校の中できちんと位置づけることができないだろうかと考えました。そこで、ピア・サポートの考え方を取り入れてはどうかと思い、「ピア・サポートではじめる学校づくり」（滝充 著）という著書から、昨年度の夏休みの校内研修会で教職員に紹介しました。これは国立政策研究所の滝充さんという方が編集されたもので、非常に分かりやすい本です。まず保護者や教職員は、年長者（高学年の子ども）が年少者（低学年の子ども）に、どういうことを仕組んでいくかという点から、機会や場を提供していきます。本校であれば、なかよし集会や6年生を送る会などの行事を低学年の子どもに向けて行う場として提供していきます。そうすると、高学年の子ども達は低学年をお世話したり、お手本を見せたり、リーダーシップをとっていきます。低学年の子ども達は、逆にお世話をしてもいい、先輩達の様子を見て、ああいう風な行動をとれば良いんだというお手本を見ていくことになります。さらに、ここで終わるのではなく、教師達が年長者の行動や思いに気づかせるわけです。「6年生はこういうことをしてくれたんだよね」とか、「こういうところが嬉

しいよね」といったことを投げかけていきます。そうすると、「楽しかった」「また遊んでほしいな」という気持ちや、「自分も6年生になったらああいうことをやりたいな」というような憧れが生まれてきます。そして、高学年の子ども達は、「1年生があんなに喜んでくれた」とか、「計画するのは大変だったけどやって良かったな」という自己有用感の獲得を経験します。ここで言う自己有用感ですが、自己肯定感や自己存在感という言葉もありますが、滝さんは自己有用感という言葉を使って、子ども達が他者との関係で、自分は頼りにされている、誰かの役に立っている、みんなから認められているという気持ちを獲得していくことの大切さを述べています。こういう取り組みの結果、高学年の子ども達の気持ちが非常に高まってきて、低学年の子ども達を探して関わっていくようになりますし、低学年の子ども達はその様子を見ながら自分達もああいう6年生になりたいと思うようになるわけです。[スライド9]

具体的に言いますと、本校がずっと取り組んできていることなのですが、全児童数が130人強ですので、1年生から5年生まですべて卒業式に参加します。ですから、6年生がするお別れの言葉の呼びかけを1年生から5年生全員が見ているのです。そして、今度はお返しに1年生から5年生の子ども達が、6年生に呼びかけをします。6年生にありがとうという言葉と呼びかけます。呼びかける言葉も全員で考えます。1年生も1年生なりに、学級の中で、～さんからこんなことをしてもらったということで話し合いをしていくわけです。縦割り班ですずっと活動をしていますので、身近に6年生がいるわけで、自分達の班の6年生はこんなことをしてくれたよということを出し合って、それを教師がまとめていきます。そして、例えば「～君、応援団の団長が格好良かったよ。僕も6年生になったら応援団長になりたいと思います」というようなことを、卒業式の時に1人ずつ発表していきます。昨年ですと、23人の卒業生1人1人に1年生から5年生までが順番に声をかけていくという卒業式をして、とても温かい雰囲気が生まれました。特に5年生は、自分達も来年はあそこに立つんだ、自分達も何か言ってもらえるんだと思って、ちゃんとしたお手本になればいけないという気持ちが強まるわけです。

縦割り班での交流の様子を説明します。たとえば、なかよし集会をする時に、まず班ごとに分かれて、6年生が司会をしながら「どんなことをやりたいか?」「ゲームならどんなことしたいか」という意見を聞いてまとめます。次回から、教室でハンカチ落としをしたり、体育館でドッジボールなどのゲームをしたりしますが、最後には必ず円陣を組んで、1人ずつ振り返りをします。今日はこういうことが楽しかったとか、こういうことをしてくれて有難うとかいうようなことを、1人ずつ話していくわけです。司会をするのはやはり6年生です。また、本校では委員会活動は5・6年生でやるのですが、栽培委員会の6年生が前に出て「このお花を植えます。植え方はこうします」ということを全員に説明します。そして8班に分かれて、プランターに花を植えていきます。1年生がそういう様子を見ながら、花のお世話をしていきます。このプランターは、玄関の周りにきれいに飾られて、子ども達が毎日水やりをしたり、枯れたお花を摘んだりという風に大事に育てていって、最後は、どのプランターが1番綺麗にお世話ができたかというコンクールまで行うようにしています。

もう一つの異学年の交流として、のつはるこども園と本校5年生の交流を進めています。のつはるこども園は、幼稚園と保育所が併設されたこども園です。このこども園の年長は来年度の1年生で、本校の入学生ほとんどがこのこども園から来ますので、かなりの子ども達が入学前から小学校の子ども達と交流をする形になります。いわゆる小1プロブレムという

問題がありますが、小学校に入学する子ども達に小学校に適応させるために幼・保から小へうまくつなげようという目的で、野津原の保・幼・小連絡協議会を立ち上げて実施しています。今年度は大きく3つのことを取り組んでいます。まず1つ目は、運動会での交流です。小学校の運動会に5年生と園児達と一緒にダンスをして参加します。ダンスをする前に、必ず練習がありますので、練習の時から交流を重ねていきます。それからこども園の運動会があるのですが、園児達だけで応援団を組みます。そうすると応援のやり方が分からないので、5年生が幼稚園まで行って、応援の方法を教えるという取り組みもしています。それから2つ目は秋の交流です。昨年度は、園児がバス遠足でハーモニーランドに行ったので、帰ってきてハーモニーランドを再現しました。ダンボール等を使って、幼稚園の教室の中にハーモニーランドを作るわけです。それに5年生が招待を受けて行きました。3つ目は3学期に交流をして入学に備えます。年長の園児と5年生は、翌年は1年生と6年生の関係になりますので、翌年の適応が非常にスムーズに進みます。[スライド10]

3. ピア・サポートプログラム

3点目はピア・サポートプログラムの活用です。先ほど言いましたように、本校では1年生から6年生までとても仲が良く、昼休みに異学年で遊んでいる様子がよくありますので、ここからもう少し高学年の子ども達に力をつけさせていくことができないだろうかと考えていました。その中で、昨年度、全学年に私が道徳の授業でグループワークトレーニングや構成的グループエンカウンターをしたのですが、そこでも、もう少し子ども達に力を付けさせる方法はないかな、社会性をつけていく方法はないかなということを考えました。そして、やはり1回1時間授業をしただけではとても無理ですし、年間を通してピア・サポートプログラムができないだろうかということを、研修で職員と話し合いました。

異学年交流が既にピア・サポートのプログラムになっているところもありますが、それをもう少し高学年の子ども達に力をつけていく方法に発展させたいということで取り組んでいました。学習指導要領の中にも、集団の一員としてより良い生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるということもうたわれています。そこで、学級活動や道徳の時間などに組み込んでいくことにしました。道徳の指導要領の4項目の中の2項目・4項目で、他の人とのかかわりを育成していこうということがあります。その中にこのトレーニングの視点を取り入れていく計画を立てました。[スライド11・12]

10時間分の実践内容をご紹介します。月に1回ずつで合計10時間の計画です。本当は学級担任に行ってもらいたかったのですが、やはりいきなりは無理ですし、私がこれまで取り組んできたことを見せることもできるかなと考えて、職員には授業を見に来てねと呼びかけたり、指導案を出したりしながら、現在取り組んでいるところです。これは6年生が異学年交流の時のサポーターとして活動するためにどういう力をつけていくと良いだろうかということを考えながらやっているもので、実際にこれが良いかどうかは、これから実践し、検証する必要があると思います。とにかく実際にやってみないことには、という思いで取り組んでいるところです。[スライド13]

これまでの実践としては、まず4月に、6年生にピア・サポートの勉強をしていくよという話をし、ワークシートを使いながら、ピア・サポートを紹介しました。ここでは、2人組を作って、お互いの自己紹介をして、次に4人組を使って、隣の人の自己紹介をやっていて、という流れです。本校の場合は、幼稚園から6年生まで人間関係が変わりません。さらに1

学年1クラスです。したがって、取り組みの中でどのように新しい発見をしていくかは、とても難しいことです。それに固定観念というか、この子はこういう子だという風に思ってしまうがちなところがあるので、そこのところを少しずつ崩していきたいと考えて、ワークを仕組んでいきました。5月と6月に人間関係づくりの構成的グループエンカウンターを取り入れて実践しましたが、その中でも友達の新しい良いところを発見しようねということを、常に伝えていきました。そして7月、9月はコミュニケーションについてのワークをしていきました。最初はコミュニケーションとはどういうことかなということを1時間行い、9月は聞き方についてロールプレイを入れながら学んでいきました。最初の1時間目の子どもの感想は、「難しかったけど、改めて友達の良いところを見つけることができてよかったです」というものがありました。それから2時間目の人間関係づくりでは、三角形を組み合わせて四角形を皆で協力して作ろうという内容でしたが、「友達と協力するとよいアイディアが出ることが分かりました」という感想がありました。3時間目は、1つの円になって、順番に話を繋げていくというエクササイズをして、「思いもよらぬストーリーになって面白かったです」という感想がありました。それから5時間目のコミュニケーションスキルのところでは、まずコミュニケーションには、言語のコミュニケーションと非言語のコミュニケーションがあるという話をしていきましたので、「表情や動きがなくて声だけで相手に伝えるのがどれだけ難しいかが分かりました」という感想がありました。聞き方のロールプレイでは、無表情で聞いているか聞いていないか、分からないようなふりをして聞くという体験と、相手の顔をしっかり見たり、うんうんと頷いたりしながら、そして更に「それはどういうこと？」という風に聞き返ししながら聞いていくという体験をしました。最初に教師がロールプレイで見せて、それから実際に皆もやってみようという形式です。すると、「質問しながら聞かれるとうれしいということが分かったから、そうできるようにこれから頑張りたいです」というような感想がありました。[スライド14]

ちなみに、本校の6年生の状況について、全国学力・学習状況調査の児童質問紙をもとに振り返ってみました。たとえば「自分には良いところがありますか？」という質問に対して、「ある」と答えた子が46.4%、「どちらかといえばある」と答えた子が42.9%でした。ですから、かなりの子ども達が自分には良いところがあると思っていますし、全国平均は7割ぐらいですから、本校の子ども達は平均以上かなと思います。ところが「友達に伝えたいことを上手く伝えることができますか？できていますか？」という質問に対しては、「良くできている」と答えた子が7.1%でした。全国平均は30%ぐらいです。本校は「どちらかといえば」を含めれば7割近くの子供達がまあまあ上手く伝えられているのですが、「あまり伝えられていない」という子どもが3割いましたので、全国平均と比較すると、伝えることに対して苦手意識を持っている子ども達が少し多いようです。一方、「友達と話し合う時、話や意見を最後まで聞くことができますか？」に対しては、「できている」が39.3%、「どちらかといえばできている」が60.7%でしたので、かなりの子どもが聞くことはできているということが分かりました。これも全国平均以上でした。「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか？」という質問には、100%の子ども達が「そう思う」ということでしたし、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか？」という質問に対して、92.9%の子が「してはいけない」で、「どちらかといえばそれはいけない」という回答も若干ありますが、合わせると「してはいけない」と言っている子は100%でした。全国平均では、3、4%の子が「仕方がない」という回答、「いじめはいけないですか？」には「あまり思わない」、「全

く思わない」と答えた子が3,4%いたんですね。しかし、本校の6年生は、それはいけないことだと考えていることが分かりました。

4. Q-Uの活用

最後にQ-Uの活用です。これは学校生活を楽しく充実したものにするための心理検査です。本校はこれに取り組み始めて4年目になります。3年生から6年生に対して行っています。大体7割ぐらいの子ども達が満足群の中にいて、全国平均を大きく上回っています。ただ、不満足群、要支援群の子どもが数人いますので、この子ども達に対してもしっかり関わりを持つよう取り組んでいるところです。[スライド15]

Ⅲ おわりに

今年度、4つのことを軸に取り組んできて、非常に高学年に自覚と責任感が出てきていると感じています。低学年にとっても、良いお手本を見る経験になっていると思います。幼稚園と5年生の交流によって、1年生と6年生のスムーズな関係につながっているということも非常に良いことで、成果として考えられるだろうと思います。また、これらの交流が、その取り組みの中だけではなく、いろいろな場面で人間関係づくりに生かされていると思います。たとえば、昨年度、問題行動の調査として、本校は数件のいじめを報告しました。本当に些細なものもありましたが、やはり子ども達が訴えてきたことなので、報告をしました。今年度は、今のところ0件で、担任からいじめの報告は上がってきていません。このようにして、少しずつ効果が出ているかなと思っています。人間関係の広がりとして、昼休みに異学年の子ども達で一緒に遊ぶという交流をしていますし、6年生の子ども達の方から、朝の読書タイムに1年生の教室に行って読み聞かせをしたいということを言い始めて、今、1週間に1回ですが、グループで交代に進めているところです。このことからさらに、6年生が中学校に進学した時にも、このような関係作りのサイクルが、中学生とも上手く人間関係ができるという形につながっています。[スライド16]

少しずつ成果は上がってきているのですが、課題としては、高学年にしっかりリーダーシップをとれるような指導・支援をすることが必要ですし、1回1回のふり返りやまとめをして、次の活動に生かしていかなければならないと思っています。しかしながら、今年度は、こんな取り組みが良いのではないかと手探りで進めていますので、さらに系統的な取り組みとなるように継続していかなければならないと思っています。また、教師自身もしっかり共通理解をして、研修を深めていかなければならないと思っています。[スライド17]

最後に、今回、私がいじめに関する取り組みについて発表するにあたり、本校職員にアンケートをとりました。すると、本校には7,8年前の様子を知っている職員がいて、今は1年生から6年生まで非常に仲良く遊んでいるけれども、7年前は、高学年の子ども達が低学年の子ども達をいじめることがあり、いじめられた子ども達は教室でまた弱い立場の子にいじめをするというサイクルがあって、学校の中が落ち着かないような状況もあった、ということでした。やはり本校に勤務した教員達が1つ1つ積み重ねてきて今があるのだなと思います。今、本校が生活面で非常に落ち着いているのはどこに要因があるかという点では、お互いを大切にする心や子どもの自主性を大切にしながら規範意識を育てること、教員全員で共通理解をしながら、理想を高く持って積み重ねてきたということあげています。それか

ら先ほどの生活研もそうですが、休み時間、職員室の中で、気軽に子ども達の情報を出し合って、話ができる関係があります。そうした信頼関係や協力体制に基づいて、常に教職員が情報共有でき、全職員で全校児童に関わることができている、ということです。そしてもう1点は、教師と保護者の間に相談しやすい関係ができているということもあります。実際に、保護者の方から「ちょっと相談があるのですがいいですか」という形で、担任と面談をしたり、場合によっては校長と面談をしたりということができている点もあるかな、などと職員と話をしてきたところです。[スライド18]

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

参考文献

- 河村茂雄・藤村一夫・粕谷貴志・武蔵由佳・NPO日本教育カウンセラー協会 2004 Q-U
による学級経営スーパーバイズ・ガイド 小学校編 図書文化
- 河村茂雄 2001 グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム～ソーシャルスキルと
エンカウンターの統合 小学校編～(編) 図書文化
- 滝 充 2009 改訂版 ピア・サポートではじめる学級づくり 異年齢集団による交流で
社会性を育む教育プログラム 金子書房
- 日本ピアサポート学会 ピア・サポートワークブック指導資料(小5～中1用)

1

【学校教育目標の具現化】

豊かな心⇒生徒指導・道徳教育の充実

①学級経営の充実

- ・Q-Uを活用した発達促進的な生活指導
- ・一人一人の心に寄り添った指導・支援

②ピア・サポートを取り入れた異学年交流

- ・自己肯定感の育成
- ・全教職員で児童を育てる相談体制

③道徳の授業及び道徳実践の充実

- ・道徳性を育む道徳資料の活用
- ・地域の人材を生かした体験活動

2

【学校教育目標の具現化】

確かな学力⇒学習指導の充実

①小中一貫教育と連動した確かな学力の向上

- ・学習指導方法等の工夫・改善
- ・学習規律の徹底

②朝のモジュール学習の充実

- ・読書タイム、ことばタイム、計算タイム、スキルタイム等

③個に応じた指導

- ・個別指導やIT指導の充実
- ・特別支援教育の充実

3

【学校教育目標の具現化】

健やかな体⇒体力の向上

①早寝・早起き・朝ごはん

- ・家庭と連携した基本的生活習慣の見直し

②体育の授業の充実

- ・授業前後のトレーニングの定着
- ・全職員で取り組む体制

③休み時間での外遊びの奨励

- ・運動が好きな子の育成

4

【学校教育目標の具現化】

家庭や地域との連携

①早寝・早起き・朝ごはん等の基本的生活習慣の確立

②充実した家庭学習の取り組み

③PTAと協力したあいさつ運動の推進

④保・幼・小連絡協議会の充実

5

いじめの対応について

いじめが認知されてからの対応は、迅速に、慎重に、丁寧に対応しなければならない。



そのためには、いじめを早期に発見する目を持たなければならない



それ以上に、いじめが起きない土壌、いじめが起きててもすぐに自浄作用の働く集団をつくることが重要

6

いじめ防止の取組

(1) 学校いじめ防止基本方針

①いじめ対策委員会の設置

構成メンバー：校長、教頭、生活指導担当、
人権教育担当、学級担任、養護教諭
※必要に応じて専門家やSCを要請

②いじめ防止についての校内研修の実施

いじめに対する基本的な考え方を共通理解し、学校全体で取り組むことを確認する

③年間指導計画77

	学級指導・学校行事	教職員研修	異学年交流
4月	学級開き 仲間づくり	引き継ぎ事項確認	
5月	お迎え遠足	生活研	なかよし集会
6月	情報モラル学習、学校評価アンケート	生活研	花植え集会
7月	いじめアンケート	生活研	折り鶴作成
8月	平和学習	生活指導研修	
9月	運動会	生活研	なかよし集会
10月	中学校体験入学、	生活研	なかよし集会
11月	東部っ子ふれあいの会、学校評価アンケート	生活研	花植え集会
12月	人権集会(いじめ追放宣言)いじめアンケート	生活研	なかよし集会
1月		生活指導研修	なかよし集会
2月	いじめアンケート	生活研	
3月	卒業式、修了式	次年度への引き継ぎ	6年生へ記念品作成

(2) 異学年交流の活動

①縦割り班による異学年交流

目標：交流活動や体験活動を通して、児童一人一人が相手を思いやるやさしい心、豊かな心を培う

方法：全校児童を8班に分け、6年生が中心となつて、児童会や委員会活動と関連させながら、活動内容を考え、企画運営する。

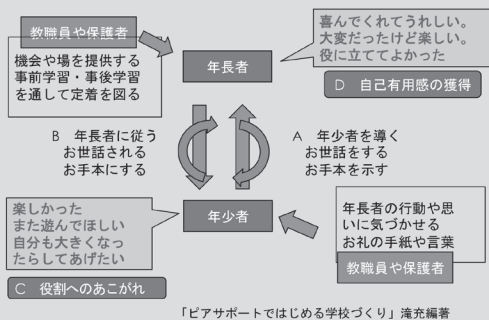
年間計画：○なかよし集会（年間5回）

○体育集会（年間3回）

○花植え集会（年間2回）

○1年生を迎える会、6年生を送る会

縦割り班での異学年交流による効果



②のつはるこども園（年長組）と小学校5年生との交流
目的：小学校への適応を滑らかにするための方策の
ひとつとして、野津原東部小学校とのつはる
こども園との交流活動を実施する。

（野津原保・幼・小連絡協議会設置要綱より）

活動内容：○運動会での交流

○秋のハーモニーランドごっこ

○こども園発表会の練習

(3) ピア・サポートプログラムの活用

①「ピア・サポートプログラム」とは

学校教育活動の一環として、教師の指導・援助の下に、子どもたちが互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育むために行う学習活動である。

そのことがやがて思いやりのある学校風土の醸成につながることを目的とする。

（「ピアサポートではじめる学校づくり」滝本編著）

※異学年交流をする中で、リーダーとしての高学年を育てる

○友だちの話をきちんと聞く

○友だちの気持ちを感じとる

○困っている友だちのささえになる

②「ピア・サポートプログラム」の位置づけ

学級活動、道徳の時間

○特別活動、人権・同和教育、生徒指導との関連

（小学校学習指導要領より）

特別活動目標：望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

道徳の内容：2 主として他の人とのかわりに関すること

4 主として集団や社会とのかわりに関すること

③実施内容・方法

項目	学習内容	時間数	月
ガイダンス	ピア・サポートとは	1	4
関係づくり	学校生活を充実したものにするには①、②	2	5 6
コミュニケーションスキル	①コミュニケーションとは ②聞き方	2	7 9
自己理解・他者理解	いろいろな考え方	1	10
アサーショントレーニング	3つの私	1	11
ストレスマネジメント	ストレスとの上手なつきあい方	1	12
アンガーマネジメント	怒りのコントロール	1	1
まとめ	これからの生活に生かす	1	2

これまでの実践

実施日	内容	ねらい
4月22日	ピア・サポートの紹介	ピア・サポートとはどんなことをするのか概要を知り、これから自分がめざすねらいを明確に持たせる
5月26日 6月17日	人間関係づくり ① ②	SGEの手法を取り入れ、不安・緊張を軽減し、多くの友だちと段階的に関わりを深めさせるきっかけとする。
7月15日	コミュニケーションとは	コミュニケーションの概念を学び、他者に好意的に受け止めてもらえる上手な指示の出し方の体験を通じて、コミュニケーションの重要性に気づく
9月10日	コミュニケーションスキル 聞き方	積極的・消極的聞き方の違いを明らかにした上で、話し手の内容や気持ちをキャッチするコミュニケーションスキルを体験的に学ぶ

(4) Q-Uの活用

目的：

- 個人の学級生活の満足度や意欲がわかる
 - ・不登校の予防
 - ・いじめの発見・予防
- 学級集団の状態を把握する
 - ・学級集団が機能しているかの点検
 - ・成熟した学級集団の積極的な育成

実施学年：3～6年生

実施時期：5月、12月の年2回

成果と課題

【異学年交流による活動の成果】

- 高学年に自覚と責任感が生まれ、低学年に対して優しく接し、行動のお手本となっている。
- 同級生同士の協力や新たな一面の発見の場となる。
- 低学年にとってよいお手本を見ることができる。
- 1年生にとっては知っている6年生がいることで安心感がある。
- 交流の活動を通して休み時間などの人間関係づくりに生かされている。
- いじめが起きにくい児童の集団づくりに寄与している。

【今後の課題】

- 高学年に対して、自分で考えてリーダーシップをとれるよう指導・支援する
- 活動を実施した後のふり返りをまとめ、次の活動に生かす
- 系統的な取組となるように教育課程の位置づけを見直す。
- 教職員の十分な共通理解や、さらなる研修の充実を図る

さいごに

本校が生活面で落ち着いている理由

- 全教職員が共通理解をし、同じ方向を向き、理想を高くもって指導を積み重ねてきたこと
 - ・お互いを大切にすることを育てる
 - ・子どもの自主性を大切にしながら規範意識を育てる
- 教職員の信頼関係、協力態勢
 - ・常に教職員の情報共有ができています
 - ・全職員で全校児童にかかわる
- 保護者の学校に対する信頼
 - ・相談しやすい環境をつくる